

同志社のはじまりと京都

——140 年前の同志社と「八重の桜」のその後を考える——

小 枝 弘 和

ただいまご紹介にあずかりました小枝と申します。

私は、大学の同志社社史資料センターに属しております。仕事は資料業務です。同志社の歴史は 140 年になりますが、140 年間で証明してくれるものは紙の資料や物の資料になります。あるいは新島襄という人が確かにこの世に存在したということは、新島が書き残した手紙や遺品が残っていることで知ることができます。そのような資料類を管理している部署が私が勤めている場所というふうに考えていただけたらと思います。普段古い資料に触れる仕事をしている人間が本日お話しをするとお考えいただけたらと思います。今回このようにお話しさせていただく機会をいただいたことに、お礼を申し上げます。ありがとうございます。

さて同志社は南に御所があり、北に相国寺があります。そのようなところにキリスト教主義の学校ができました。周囲の状況だけ考えれば、なかなか変わった場所にあると説明はできると思います。しかし、もともと京都は御所もそうですが、仏教の勢力も強い場所です。このような状況で、同志社はなぜ生きてこれたのかも考えなければならぬと思います。そこで、同志社が設立したころ、この周りはどうなっていたのかをまずはお話しさせていただこうと思います。

同志社女子大学の今出川キャンパス辺を歩いたことがある方はよくおわかりかと思いますが、江戸時代や明治時代の京都の香りが至るところに残っています。御所もそうですが、今出川通沿いには二條家の当時の堀が一部残っています。そうした京都の伝統がある場所に学校を開校した時の状況を最初にお話しさせていただきます。その次に八重についての話をさせていただきます。

同志社が開校した 1875 年以前の京都の状況を、年表に簡単に書き出しました。禁門の変があった後に戊辰戦

争、その後すぐに元号が明治に変わりますが、この時に実施された東京奠都、つまり、天皇陛下の東京への行幸、そして、あとの版籍奉還と廃藩置県という 2 つの制度により、日本の土地と人民のあり方は 180 度変わりました。その結果、同志社が今出川の地に定着できる素地ができたとは私は考えています。

ここで、京都の絵図を前に出します。上部に薩州屋敷とあります。今の同志社大学今出川キャンパスの一部で、薩摩藩邸跡と現在では言われています。皆さんがこの会場を出てから今出川の地下鉄のほうに歩いていくと、途中で左手に今出川御門があります。門の内側を覗けば京都御所を近くに見ることができます。薩摩藩邸からみれば数百メートルという短い距離に、当時の最新兵器の大砲であれば十分に届く距離に禁裏御所があることになります。薩摩藩はそのような場所に藩邸を構えていました。その真横に二條家とありますが、この辺が今の女子大学及び同志社女子中高の敷地の一部になります。この絵図の年代は幕末の 1863 年ぐらいになります。同志社ができる 14~15 年前です。

さらにこの絵図を見ていくと、もともとは公家屋敷が数多くあったことがわかります。女子部の一番最初の始まりは柳原前光邸です。今の京都迎賓館あたりですが、江戸末期のころにはこの周辺にも公家屋敷がたくさんありました。今では、京都御苑の石垣に囲まれた中に公家屋敷というのはほとんどないというのはご存じのとおりです。江戸時代から明治時代へと経過していく中でこのような変化が起こります。

この絵図を出した理由は、同志社設立は江戸時代から明治時代が変わって間もないころでしたので、当時は絵図にあるような風景がまだ幾分残っていたためです。古写真を見ますと、公家屋敷の堀が残っていることがわかります。築地堀と言われるものです。江戸時代、各御門から中に入っていくと、普通に人が行き来できるように

なっていました。その人が通るところは築地塀で囲まれています。公家屋敷の中が見えないようにする背の高い塀です。

当時の同志社女学校の写真を見ますと、手前に塀があり、2階建ての同志社女学校を見ることができます。そして、その奥に形の違う建物を確認できます。二條家の屋敷です。当時は敷地の半分ぐらゐは二條家がまだ住んでいたようです。同志社が設立したころはこうした風景が他にもあったことをうかがわせます。おそらく、江戸時代から明治に入って10年もたない時期に学校ができましたので、まだ周囲には公家屋敷がいたるところに残っていたと考えられます。そういう雰囲気、同志社が誕生したころの今出川周辺にはあったと考えられます。

二條家の屋敷ですが、その後、女子大で購入し、銅駝寮になりました。現在は大阪に移築されて鳳林寺の本堂として現存しています。

話を戻しまして、現在の京都御苑とはどのようなところであったのかについて話を進めます。「都名所図会」に禁裏御所の図が描かれております。この絵図は1780年なので、江戸時代の中期ぐらゐです。その図を見ますと、その当時の様々な情景が反映されていることがわかります。禁裏御所の周囲の道に人がちらほらと歩いているのを見て取ることができます。また、一部には集団がいることもわかります。この絵図はその屋敷から禁裏まで行列で行くというところをあらわしているものだと考えられます。それ以外は一般人と考えられます。禁裏御所の近くに一般人は簡単に入れないのではないかというイメージがあると思いますが、様々な文献を見ていくと、禁裏御所と公家屋敷を含む九門内、すなわち内裏に一般人は自由に出入りができました。

江戸時代の京都の旅行ガイドブックもあります。当時のガイドブックを見ると、多くの場合、最初のページに見所として内裏が挙げられています。1721年刊行のガイドブックにも一番最初に内裏とあります。そこには、一般人は9つの御門から入ることができ、時によれば、お許しがあって禁裏御所の中を見ると説明があります。私が調べる限りでは、年間に少なくとも4度は一般人が禁裏御所に入ることができました。ほかにも先行研究を見てみますと、人が集まってくることを見越して出店が出ていたとも言われます。そのため、一般の方々には内裏は今よりも近い存在だったと考えられます。ある意味、京都旅行のメッカが内裏の性格としてあると言えます。現代の視点から考えますと、どうしても天皇陛

下がいらっしやるために内裏は一般人とはあまりにも疎遠と考えるかもしれませんが、事実はそうではないようです。人が集まる場所だったというのが江戸時代からずっとある内裏の一つの考え方です。

このように、禁裏御所やこれを含む内裏は日本文化の中心であり、また、政治の権威の象徴であり、同時に観光のメッカだったわけですが、1869年に大きな変化が起こります。東京奠都と言います。簡単に言えば、天皇陛下が京都から江戸に移ります。一応「行幸」という言い方ですが、事実上、東京に天皇陛下が移られることとなります。

この時に禁裏御所を中心とする内裏で何が起こるかということになります。内裏にいる公家は天皇陛下がいなければ、儀式が成り立ちませんし、その存在意義を失いますので、東京奠都とともに多くの公家が東京へ移ります。同時に周りの職人も一緒に東京へ移ることになります。結果、明治時代の最初期の内裏はほぼもぬけの殻となってしまいます。

一例を示しますと、『幕末の宮廷』という書籍に一條家に勤めていた下橋敬長という人物が明治6、7年頃の内裏の様子について回顧したものが掲載されております。これによりますと、草木は生え放題、瓦は落ちてかたつての姿は見る影もなかったとのこと。さらに、二條城が1万円、御所が5,000円で売りに出ており、買う人がいないという状況だともあります。売買が事実かどうかわかりませんが、10年も経たない間に東京奠都によって内裏の中が随分と変わってしまったことがわかります。これは同志社英学校が創立される1、2年前の内裏の状況です。1880年代に内裏が現在のような京都御苑として整備されるまでの数年間、禁裏御所は京都博覧会の会場として使われ、仙洞御所は京都府と島津製作所が共同して開発した気球の打ち上げに使用されています。この間、内裏はある意味京都の象徴的な場所として利用されていますが、従来の機能とは異なる利用をされていた時期でもあります。

想像するしかありませんが、このような状況はキリスト教主義の同志社が設立される上では有利に働いたかもしれせん。のちの話ですが1928年昭和天皇の即位式が禁裏御所で行われた時、同志社の有終館で失火がありました。その時には、即位式は終了していたのですが、天皇陛下が滞在中に失火が起きたため、当時の理事が全員引責して総辞職しています。時代背景もありますが、京都御苑が歴史上どのような意義を持つかで周囲はその影響を受けました。少なからず同志社の創立に当時の内

同志社のはじまりと京都

裏の状況は作用していたのではないかと考えられます。

次にもう一つ、北にある相国寺についてお話をさせていただきます。同志社の歴史をご存知であれば、草創期に仏教勢力から圧力を受けたと聞いたことがあるかと思えます。同志社が現在まで歴史を紡いでいることを考えますと何かと折り合いをつけてきたのではないかと想像します。ここでは、同志社が現在の大学の今出川キャンパスの跡地を入手するあたりの相国寺について話を進めていきます。

相国寺は京都五山の1つとして有名です。1392年室町幕府三代将軍の足利義満の庇護のもとで誕生しました。大学の今出川キャンパスがかつて薩摩藩邸があった場所ですが、そもそもは相国寺の土地でした。相国寺は現在よりもはるかに広大な土地を所持していましたが、1788年、江戸時代の天明の大火でかなりの部分を焼失しました。復興には相当の費用がかかりますが、南側の焼失部分の再建までは難しかったようで、藪地になっていたと記録があります。この状況は幕末においても変わりませんでした。この地に目をつけたのが薩摩藩でした。これが薩摩藩邸が誕生する簡単な経緯です。

これを証明する文書が相国寺に所蔵されています。相国寺と薩摩藩の間で交わされた「借用地証状」という文書があります。1862年に交わされた文書です。内容は相国寺南部にある土地7,000坪を1年20石で20年借用するというものです。つまり、1882年までの借用となりますが、この間に江戸から明治へと変わり、所有地に関する考え方が変わります。相国寺と薩摩藩が契約を結んだ幕末の段階では、薩摩藩に貸した相国寺の土地という認識ですが、明治時代になると状況が変わります。

明治時代に入ると間もなくして、江戸時代の土地と人民のあり方が変わります。1869年の版籍奉還、1871年の廃藩置県が象徴的な行政改革です。藩に属していた土地と人民のあり方を根底から変える出来事でした。つまり、明治新政府は藩が私有していた土地と人民を天皇に帰属するように変えていきます。その結果、薩摩藩邸のあり方が変わります。

版籍奉還、廃藩置県と断行される最中に、新政府の太政官は大阪と京都の藩邸に関して2回命令を出します。1870年と1872年に布告された上知令です。まず1回目の上知令では、藩邸を売り払うか上知するか京都府まで届けるようにという通達でした。ただし借地は返すべきとの説明も付されています。薩摩藩邸については借地ですので、この段階で相国寺に返却することもできたので

すが、理由は不明ですが返却していませんでした。

1回目の上知令は大きな成果を上げることができなかったことが、1872年の2回目の上知令をみるとわかります。「縣々区々ノ取計有之候テハ不都合ニ付」とあり、1回目の上知令以降、藩邸の所有者と府側で上知が進まなかったことが伺われます。その結果、2回目の上知令では、「出張所蔵屋敷等悉皆有形ノ儘上邸致候」と、藩邸内にある施設全てを含めて府に引き渡すよう、強制的な命令となっています。結果、その年のうちに薩摩藩邸を含めた京都の藩邸は京都府に接収されることとなります。そして、すぐに民間に売却されていきます。薩摩藩邸は、旧薩摩藩士族である池田春苗という人物に売却されました。これは同志社英学校が開校する3年前の出来事です。この3年間については、薩摩藩邸の所有者がどのように変遷したのかわかりません。数多く出版された新島襄に関する伝記によると、山本覚馬が所有する土地となり、その後同志社に500円あるいは500ドル、550ドルで売却したと言われますが、実際のところは地券などの一次資料を見つけることができていないのでよくわかりません。

相国寺からすれば借用していた土地が京都府に接収され、売却されてしまうこととなりますが、この頃は寺社も新政府から制限を加えられていました。1871年に「社寺領上知令」が太政官から布告され、寺社は境内を除き所有していた土地を上知されます。相国寺も上知の対象となり、境内以外の土地を接収されていたことが京都府庁文書を見るとわかります。一例を挙げますと、「社寺領上知令」から3年後の1874年2月に相国寺の各塔頭の住職が連名で京都府に提出した口上書があります。この口上書は境内以外の上知された土地の返却を嘆願するものです。内容を見ますと、相国寺は度々土地の返却を求める嘆願を京都府に対して行っています。この段階では、1872年11月2日、1873年3月17日、同年8月7日、同月25日、同年10月12日とすでに5回の嘆願の書類を提出しているが、京都府からの沙汰が何もないことが最初に書かれております。のちに土地が戻り、現在の相国寺の形になっていくわけですが、同志社英学校の開校する1年前がこのような状況でした。相国寺は貸し出していた土地が上知令されたこともそうですが、寺院の存続そのものが厳しい状況でした。おそらく1876年に同志社英学校が薩摩藩邸跡に移転するころも劇的に変わる状況ではなかったと推察しています。

このように薩摩藩邸跡を挟む南北の地は、江戸時代と明治時代では大きな違いがありました。周りが混沌とす

る中で、同志社英学校が移転してきたのではないかと推察しています。

1つお伝えしておきたいことがあります。1876年に同志社は今出川の土地に移転してきました。前年は借家で開校式を行っておりますので、学校の財産というべきものは今出川への移転で初めて形にできたと言えるかもしれません。そして、この地に第一寮、第二寮、そして食堂を建設しました。土地の坪数は「同志社英学校沿革」「同志社記事社務記録第十八号」によると5,855坪です。この5年後の1886年、今出川校地の状況がどのようであったか調べたところ、「同志社英学校沿革」によると、所有地の面積が11,875坪、(評価額1,317円67銭)、校舎の資産価値が18,638円67銭とあります。土地だけでも2倍となり、資産が順調に増えています。さらに、4年後の新島が永眠した1890年、「同志社所有地明細圖」によると土地の坪数は33,806坪1合9勺ありました。新島襄はその教育思想やその実践が目玉されますが、アメリカン・ボードの援助は受けているものの、学校の資産を着実に増やした優秀な経営者でもあったのではないかと考えられます。

それでは、もう一つの話に移りたいと思います。新島八重のことです。八重の桜が終わってからしばらくになりますが、女子大では八重の桜が終わった後もツアーを行い、会津とつながりを持ち続けています。さすがです。

私は八重の桜が始まるまで、八重について詳しく調べたことはありませんでした。人づてに八重の悪評を聞いていた程度です。先行研究はほとんどありませんでした。そのような中で八重の桜の放映が決定し、NHKへの協力が決まっていきます。非常に厳しい状況でした。そこから八重の資料を丹念に読み始めました。読み進める中で、八重の人物像に対する考え方も変わってきました。その人物像を表すかもしれない一つの資料を紹介します。神奈川県知事からの感謝状です。1899年に起きた、約3200戸も焼き払った横浜の大火災の罹災者に対し、35円を寄付したことに対する感謝状です。私が調べる限り、八重と横浜に強いつながりがあることはうかがわれません。しかし、八重が残した資料にはこのような感謝状がいくつか残っています。関係の有無は不明であれ、八重が社会的弱者には手を差し伸べようとする人物であったことをうかがわせる資料です。大河ドラマの主人公であり、震災復興のシンボルとなった八重を説

明するために、私はこのような資料を重視しました。

ご存知のように八重は同志社の創立者新島襄の妻ですが、八重が京都に来る前には会津藩にいました。彼女が現在の年齢で23歳の時、会津藩はその存亡をかけて明治新政府軍と籠城戦を行います。そして、結果会津藩は敗北し、会津藩は消滅します。八重は故郷を失うという経験を持っていることが私は重要と考えます。その後八重は京都に来ます。そして、新島と出会い、結婚します。

ご存知の方も多いかと思いますが、八重にとっては2度目の結婚です。1度目の結婚相手は川崎尚之助という人物でした。籠城戦と共に戦った夫婦でしたが、会津藩の戦後処理の過程で離れ離れになり、その後会うことはなかったと考えられます。八重にとって新島との結婚は2度目の結婚で、出会ってから約4ヶ月で婚約しました。

このころの八重の新島に対する気持ちを伺う資料に、八重が結婚前に作成したと考えられる資料「手芸品」があります。表には布を切り貼りして花を表現し、「山本八重」の印を押しています。一方、裏側には、赤字で「山本八重」と書かれている他に、鉛筆で「Neesima Yaye」「Joseph」「Yaye Neesima」と何度か書き込まれた跡があります。資料の作成時期が明確ではありませんが、婚前の資料とすれば、自身の名前を結婚相手の姓に組み合わせて、ローマ字で何度も練習した八重の気持ちを想像すると、新島との結婚を前向きに考えていたのではないかと思います。

一方で、新島も八重を大切にしていたと思われます。その事例として、夫婦の間で交わされた手紙を紹介します。八重が新島に送った手紙は現在確認できないのですが、新島が八重に送った手紙はわずかですが残っています。代表的な2通を紹介します。1つ目は1880年2月25日付の手紙です。長さは2メートル52センチあります。内容は出先の備中松山藩での15日間の出来事をつづった内容です。もう1通は、1890年1月4日付の手紙です。こちらの手紙も長く、2メートル24センチあります。新島が永眠する19日前に書いたものです。内容は、神奈川県大磯で病氣療養中の新島の元に行こうとする八重を制止するものです。西洋風の生活をしていても、日本人なのだから、京都にいる新島の母であるとみの面倒を見るようにというものです。新島の考え方がよくわかる資料です。

注目したいことは、手紙の長さです。私信とは他人に読まれることを想定していないと考えられますので、書

いた人間の気持ちや考えが素直に反映していると考えられます。特にその長さは書く相手に対する気持ちを反映していると考えられます。また、八重が新島に送った手紙は残っていないのですが、封筒だけが残っているものがあります。その中で1889年11月19日付の封筒に、新島は「keep」と墨字で書いております。新島は保存しておくべき資料にはこのような記述をしますが、八重からもらった手紙を保存すべきと考えていたようです。中身はうかがい知れませんが、八重との対話を新島がどのように考えていたのか、うかがい知れるかと思えます。

二人の結婚生活は14年と決して長くはありませんでした。しかし、その夫婦仲は決して悪くなかったことが多くの資料からうかがわれます。新島が永眠した時、八重は45歳でした。八重の永眠は86歳ですので、まだ人生の半分を過ぎたところですが、次は、八重の後半生の代表的な活動の一つを紹介します。

1890年1月23日、新島は永眠しました。八重は相当のショックを受けていましたが、3ヶ月後には次の活動に携わろうとしていたことがうかがわれます。日本赤十字社での活動です。八重が残した資料の中に日本赤十字社の正社員となったことを示す証書があります。ここでいう正社員とは、一般的な社員を表す言葉ではありません。年間3円を納める人物に与えられる、名誉称号のようなものです。つまり、自ら進んで貢献することで得られる称号です。八重は新島が永眠した3ヶ月後には自ら進んで赤十字と関わって行ったことがうかがわれます。

この赤十字ですが、そもそもは博愛社という団体が前身です。博愛社とは1877年の西南戦争の際に敵味方を分け隔てなく看護したことで知られます。赤十字はこの考えを受け継いで、1887年日本赤十字社と改名しています。よって、赤十字は戦時看護を主たる目的の1つとした団体でした。この時は平時看護という考えはなかったことを付け加えておきます。つまり、戦争が起こった際には率先して看護活動を行うことが、赤十字の規約に明記されております。新島の永眠から4年後には日露戦争、さらに10年後には日露戦争が勃発します。これに赤十字は関わり、八重も二つの戦争に看護活動を通じて関わることになります。

ただし、不思議なことがあります。日露戦争の時、八重は49歳でした。日露戦争の時は60歳です。赤十字が派遣した篤志看護婦は若い女性を数多く派遣していますが、この点から考えれば、八重が看護の知識においても、活動においても専門的に看護を学んだ女性と同じ働きができるとは考えにくいと思いました。そこで、八重

が残した篤志看護婦関係の写真を見ていると興味深いことがわかりました。いずれも八重は看護活動をしているわけではなく、中心的な役割をしている姿が写真に収められています。そのうちの一枚の裏面には「新島監督官」とありました。要するに、八重は若い看護婦を率いる監督者として派遣されています。このように看護婦を率いる女性は篤志看護婦の中でも婦人会に属する人々でした。婦人会に属する人々は全国的にもしくは地域において名の知られた女性である必要がありました。八重は少なくとも京都においては監督者を任されるだけの知名度があったと考えられます。この背景には、当時はまだ一般化していなかった看護婦という職業を宣伝する意味がありました。著名な人物が看護活動を行う姿を広く見せることで、看護活動の尊さを知らしめし、世間の看護という活動に対する認識を改める意味がありました。八重の本当の意味での赤十字への貢献はここにあると思います。補足ですが、日清戦争から日露戦争までの10年間で、八重は看護の知識も技量も身につけています。それでもなお、八重に期待されていたのはその肖像の影響力であったと考えられます。

看護活動以外にも、八重は日清戦争を契機に慈善活動に関わります。2つ代表的な事例を紹介します。1つ目、八重は1901年に愛国婦人会京都支部の創立委員に任命されています。愛国婦人会とは日清戦争以降、戦死者の遺族や重篤な後遺症をもつ人々に経済的支援をする団体です。会長は岩倉具定夫人久子でした。この団体もまた、関わるためには年間1円を払う必要がありました。おそらく八重は支払っていたと考えられます。

もう一つは、京都婦人慈善会です。この会は1887年の設立で、昭憲皇太后の令旨で伊藤博文夫人梅子が会長となって設立されました。八重は新島とともにこの会の発会式に参加していますが、日露戦争後には理事を務めるなど積極的に関わっています。特に、この慈善会は最初は盲ろうの人々の経済的支援を目的としていましたが、のちには災害罹災者などの支援も行うようになりました。特に、日露戦争後には女性が自立して生活ができるようにミシンを教える学校、慈愛手芸女学校を設立しました。八重はこの学校設立の建築費募集に大いに貢献したようで、その活動をたたえる謝状を受け取っています。慈善会については資料が少ないため、詳細は分かりませんが、活動内容から考えると、出費をとまって参画する団体ではないかと考えられます。

2つの団体を紹介しましたが、いずれも名前の知られた人物の夫人が会長を務め、慈善活動を展開しました。

そして、戦争で傷ついた人々だけでなく、その人びとが抱えている家族の経済的支援を行いました。この2つの会に関わった八重の視点は、戦争で傷ついた人々だけでなく、その人々を支える家族に対しても手を差し伸べようとするものであったのではないかと思います。この視点が、先ほど説明した神奈川県知事からの謝状に見られる八重の活動にも関わっているのではないかと私は考えています。

以上、2つのことを大きくお話ししてきました。開校したばかりの同志社は明らかに異質な存在でしたが、江戸時代から明治時代に至る国策の過程で周囲が弱体化したことは、幾分か学校運営の助けになったと思われる。今では当時の混沌した状況を知ることは難しいです

が、長い歴史を歩んできているが故に、今出川キャンパスは興味深い歴史のある場所となりました。是非、歩いて歴史を確認してみてください。

また、ポスト八重の桜をどうするのか、考えるべき時に来ています。今日は八重の生涯の一部を紹介しました。故郷を喪失するという体験から京都で新しい生活を受け入れ、後半生は様々な活動に関わっていた八重の生涯から何を見出すかが課題と思います。八重の人物評は人によって異なりますが、八重の歩みは現代の私たちが人生を考える指針になると思います。是非、八重の資料を手にとっていただき、ご自身の歩みに照らして考えていただきたいと思います。ありがとうございました。